

美術の窓(128)

展示のしかた

大和文華館館長 浅野秀剛

今年の正月、アメリカのフィラデルフィア美術館に浮世絵の調査に行った。私は、30年前から欧米等に所蔵されている浮世絵の調査をする機会に恵まれ、年に2回ほどの割合で出張しているが、フィラデルフィアは比較的新しい。3年前に初めて訪問、今回は3度目である。3年前もそうだったが、美術館のスタッフに真っ先に案内されたのが、マルセル・デュシャンの展示室である。そして、通称「大ガラス」というガラスの作品と、通称「遺作」という常置の作品を鑑賞した。その二作とも、取り外して貸し出すことができない作品、換言すれば、フィラデルフィア美術館でしか見ることのできない作品である。そのような(有名な)作品をたくさん持っている施設は強い。かくして、デュシャンのファンは必ずフィラデルフィアを訪れることになる。

東大寺の大仏も動かさないので、大仏を見たい人は奈良に来なければならない。だから東大寺は強い、ということになるのであるが、3月22日から、あべのハルカス美術館で、開館記念特別展「東大寺」が始まった。誕生釈迦仏をはじめ、東大寺の宝物を約70点お借りしての展覧会である。展覧会に出品するのは、当然ながら動かすことのできるものである。奈良と大阪は隣なので、何もわざわざ大阪に運ばなくても奈良に行けばいい、という方もいるが、それは物事の一面だけを捉えて

いるように思う。第一、東大寺に行っても、それだけの宝物を一時に拝観することはできない。日頃公開していないものも多いので、全部を見るには、相当の期間を要するのである。さらに重要なのは、展示のしかた、お見せする方法である。仏像や仏画は信仰の対象であるため、然るべきお堂に置かれ、然るべき法要のために掛けられる。当然、堂に置かれた信仰の対象を拝観させていただくということになる。美術品として鑑賞するのは二の次というわけである。ところが、美術館に運ばれて展覧会に出された仏像・仏画は、主客が入れ替わり、美術品として鑑賞することが第一となる。細部まで良く見えるように展示されるのである。作品の保全とすることがあるため、ガラス越しが多くなるのは止むを得ないが、そのことを除けば、鑑賞優先に展示されるのである。

フィラデルフィア美術館の「大ガラス」と「遺作」は、作者が設計し望んだ形で展示鑑賞されるという点では、一つの理想の姿である。しかし、100%ではない。(ないものねだりと言うかもしれないが)移動もできないし、作者以外に展示に関与できないからである。フィラデルフィア美術館には、ヨーロッパの修道院、中国の邸宅、日本の茶室なども移設復元され、そこにも作品が展示されている。それは、作品が、本来どのような場所にあったか、どのように置かれていたか、とい

うことを示す狙いがあり、その意味では一つの理想の展示であるといえるであろう。しかし、100%ではない。作品そのものを鑑賞することを優先するとすれば、他に方法がある。一例を挙げると、茶室の掛軸は、遠くて良く見えない(茶室に上がれば理想であるが、作品の保全の問題が生じる)。

お前は何を言いたいのか、というお叱りを受けそうであるが、展示一つにしても100%の展示はない。いろいろ考えて工夫し、その結果、通常とは異なった方法で展示することも時に必要ではないかと言いたいのである。

私の美術史における専門は、浮世絵・絵入版本であるが、本来、掛軸は床の間に、屏風は座敷に置かれて鑑賞されるべきものである。それを美術館では、展示ケースに入れてお見せするのが普通である。ガラス越しでない方が良く決まっているが、なかなか難しい。画卷や画帖はのぞき用ケースに入れるなどして展示するが、全巻・全帖展示するのはやはり難しい。浮世絵版画は額に入れて展示することが多く、その場合、間近で見ることができるので助かるが、それでも、ガラス越しであり、画面の周囲がカットされることも多い。そうでない場合でも、さすがに裏までは見ることができない。自分のものであれば、画卷・画帖は手に取って、順々に繰りながら見ることができ、版画であれば、手に取って、裏まで見ること

ができるのに、展示では一定の制約を受けるということを言いたいのである。

フィラデルフィアでは、美術館のスタッフの好意により、調査最終日の夕方、近くにオープンしたバーンズ・コレクションの新美術館も見ることができた。このコレクションの凄さはさておき、新美術館もバーンズ邸での展示をそっくり模していた。最初に入るメインルームの北壁はルノアールとセザンヌだけ33点展示され、西壁の中央にセザンヌの大作「カード遊びをする人たち」、その上に、スーラの大作「ポーズをする女たち」が掛けられていた。私などは、「ポーズをする女たち」をどうしてあんな高い位置に掛けるのだろう、良く見えないよ。と思うのであるが、バーンズ邸の再現というコンセプトで掛けられているのであるから、否も応もないということになる。しかし、その作品をお借りして展示することができるとすれば、絶対にあんな高い位置には掛けないであろう。

すべからくそうであるが、展示のしかたにも絶対はない。私は、昨年6月からあべのハルカス美術館の館長も兼務しているが、3月22日に始まった開館記念特別展「東大寺」の展示にも、それを直接担当した学芸スタッフなど、関係者の意志が込められている。是非、足を運んで確かめていただきたいと願う次第である。

季刊 美のたより No.186

平成26年4月8日

発行 大和文華館